

第1章 精華町の概要

第1節 自然的・地理的環境

1. 位置と面積

京都府相楽郡精華町^{そうらくぐんせいからちょう}は、京都市の南方約28km、京都府の南西端に位置し、東は木津川市、南は奈良県奈良市、南西は奈良県生駒市、北及び北西は京田辺市に接しています。町域は、東西4.75km、南北4.85km、面積は25.68km²を占めています（図1-1）。

精華町は町域全体が学研都市の区域となっています。学研都市は、3府県（京都府・大阪府・奈良県）8市町（精華町・京田辺市・木津川市・枚方市・交野市・四条畷市・生駒市・奈良市）に分散配置された12のクラスターと呼ばれる地区から構成されており、精華町には中心クラスターと位置づけられる精華・西木津地区をはじめ、南田辺・狛田地区^{みなみたなべ こまだ}、平城・相楽地区^{へいじょう そうらく}の3つのクラスターが設定されています（図1-2）。

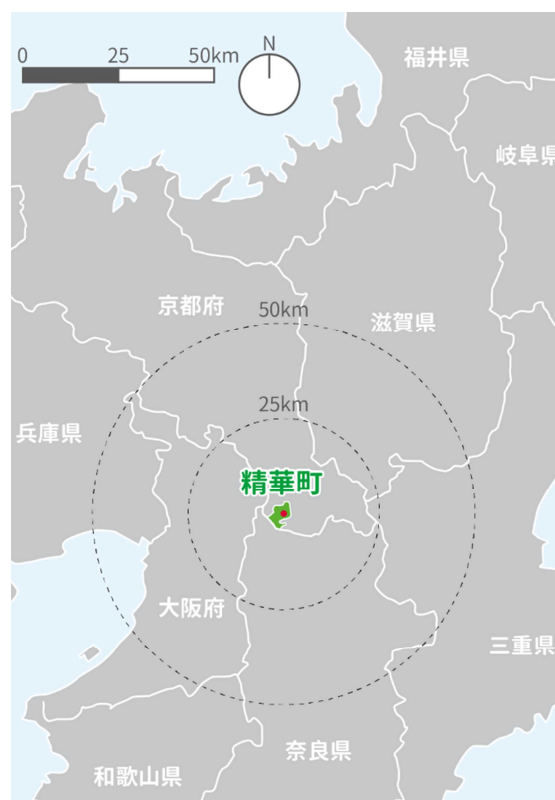


図1-1 精華町の位置



図1-2 学研都市における精華町の位置

出典：精華町第6次総合計画

2. 沿革と町名

江戸時代、精華町域には、菱田村・下粕村・北稻八間村・南稻八妻村・植田村・祝園村・菅井村・山田村・乾谷村・柘榴村・東畑村の11か村がありました（下粕村は、里村・僧坊村・谷村・船頭村の4か村として扱われることもありました）。

明治22年（1889年）4月1日、町村制の施行に伴い、粕田村・稲田村・祝園村・山田荘村の4か村になりました。

昭和6年（1931年）10月1日、粕田村・稲田村・祝園村の3か村が合併して川西村が成立しました。

昭和26年（1951年）4月1日、川西村と山田荘村が合併して精華村が誕生し、昭和

30年（1955年）4月1日に町制を施行して精華町となり、現在に至っています（図1-3）。

精華町という町名は、明治25年（1892年）から大正9年（1920年）まで存在した精華高等小学校、及び昭和22年（1947年）に創立された精華中学校の校名に由来します。

精華高等小学校は、粕田・稲田・祝園・山田荘・相楽（木津川市）の5か村、精華中学校は、川西・山田荘・相楽の3か村による学校組合で設立された学校です。いわゆる「昭和の大合併」の際、精華中学校を共同で運営していた3か村のうち川西・山田荘の両村が合併し、学校の名前を取って精華村が誕生しました（相楽村は木津町と合併し、精華中学校からは離脱）。

精華高等小学校の校名は、開校2年前の明治23年（1890年）に発布された教育勅語の1語を取ったものです。「精華」という語は「物事の真価とすべきすぐれたところ」、「すぐれていて、はなやかなこと。光彩」（『広辞苑』）を意味し、古代中国の歴史書である『史記』や平安時代の勅撰漢詩文集である『経国集』等、中国や日本の古典にも登場する言葉です。

このように、精華町の沿革と学校の歴史とは密接に関係しており、共同で設置・運営していた学校の名前が町名の由来となっています。精華町のように、現行の市町村名が自然的・地理的由来に基づくものではなく、近代の学校名に基づく例は全国的にも珍しいといえます。

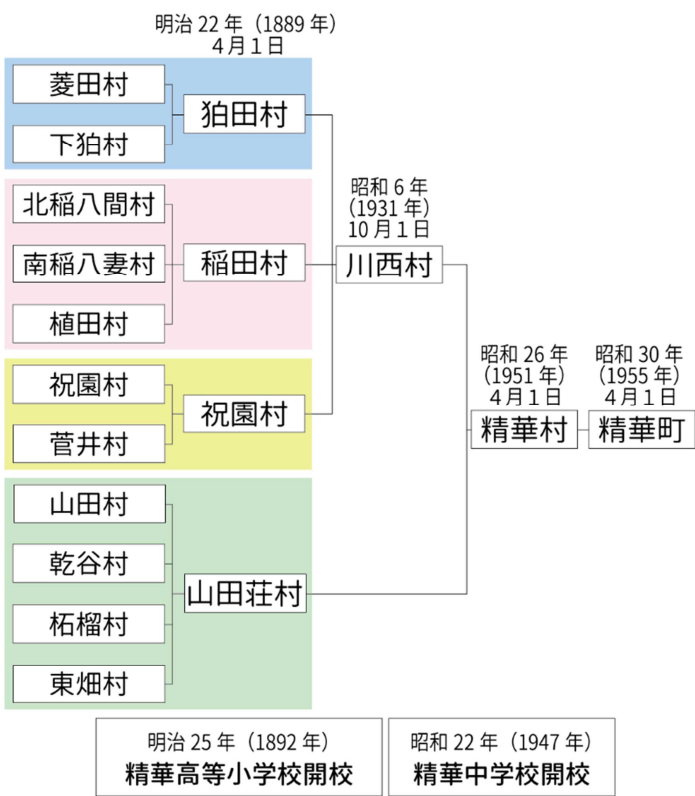


図1-3 精華町の沿革

3. 地名

図 1-4 は、令和 6 年（2024 年）時点における精華町内の各地区の位置を示したもので、表 1-1 は各地区の人口・世帯数をまとめたものです。

菱田・下粕・北稻八間・南稻八妻・植田・祝園・
菅井・山田・乾谷・柘榴・東畑の各地区は、近世の
村を引き継ぐ大字です。このうち、菱田（菱田・
たき はな おおあざ 滝ノ鼻）、下粕（里・僧坊・谷・舟）、祝園（西北・
にしきた 東・中・南）は、前近代から複数の集落で構成さ
れてきました。

近代になり昭和 20 年代に、旭（下狛）の集落が
成立しました。昭和 40 年代後半～60 年代は中規模
住宅開発が進み、木津川左岸の田園地帯の一角に

中久保田(菱田)・北ノ堂(菅井・祝園)・馬渕(菅井)といった新興住宅地区が造成されました。また、祝園の南地区のように既存集落の周辺部に新興住宅地が拡大する地域もありました。このような大字内の既存集落や新興住宅地区の名称は、住所表記には表れませんが、自治会等の住民生活の基礎単位として機能しています。一方、狛田・祝園西・精華台・光台・桜が丘は、昭和 60 年代以降に丘陵地や駅前前の土地区画整理事業に伴い新たに形成されたまちで、既存の大字から分離して設定された地区です。

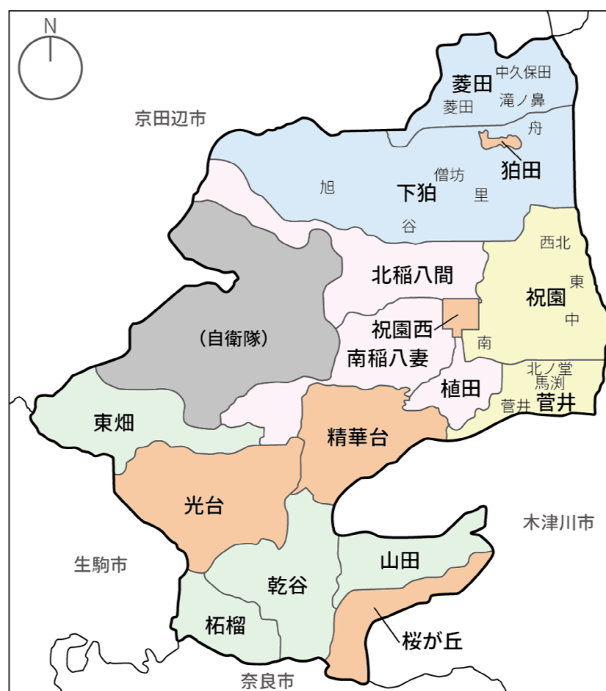


図 1-4 各地区の位置

表 1-1 大字別の人口・世帯数

大字名	人口			世帯数			高齢化率
	平成 26 年 (2014 年)	令和 6 年 (2024 年)	増減率	平成 26 年 (2014 年)	令和 6 年 (2024 年)	増減率	(★は令和 6 年の町平均： 26.8%より低い)
菱田	2,875	2,890	0.5%	1,116	1,302	16.7%	31.2%
下狛	3,160	2,804	-11.3%	1,304	1,329	1.9%	36.3%
北稲八間	804	746	-7.2%	378	371	-1.9%	33.8%
南稲八妻	1,106	1,020	-7.8%	502	524	4.4%	42.0%
植田	764	984	28.8%	328	418	27.4%	★20.6%
菅井	1,251	1,296	3.6%	524	580	10.7%	35.7%
祝園	3,717	3,527	-5.1%	1,621	1,685	3.9%	31.8%
山田	584	540	-7.5%	249	249	0.0%	44.1%
乾谷	393	307	-21.9%	158	149	-5.7%	49.2%
柘榴	308	247	-19.8%	125	119	-4.8%	50.2%
東畑	705	549	-22.1%	240	242	0.8%	41.5%
桜が丘	5,644	5,219	-7.5%	2,055	2,204	7.3%	29.7%
光台	8,063	7,360	-8.7%	2,862	3,050	6.6%	★24.8%
精華台	6,526	6,679	2.3%	2,056	2,431	18.2%	★14.0%
祝園西	1,441	1,399	-2.9%	637	674	5.8%	★19.2%
狛田	—	703	—	—	241	—	★5.0%

出典：精華町住民基本台帳（各年8月1日現在）

4. 地形

精華町は、山城盆地の南西部に位置します。町域の東端を北流する木津川の左岸には沖積平野が広がり、中央部以西には神奈備丘陵（京阪奈丘陵）が広がっています。神奈備丘陵は、標高が100～200mのなだらかな丘陵地です。町域で最も高い東畑の嶽山でも標高は259.5mにとどまります。南部は平城山丘陵に接しています。

木津川沿いの沖積平野は、町域を南北に縦貫する近鉄京都線・JR学研都市線（片町線）・府道八幡木津線の並走地点付近を境として、東部の氾濫平野と西部の扇状地とに二分されます。氾濫平野には、近世に築堤される以前に形成された木津川の旧河道や自然堤防がみられます。自然堤防付近や、扇状地と丘陵の境界部には、古くからの集落（滝ノ鼻・舟・里・僧坊・北稻八間・南稻八妻・西北・東・中・植田）が立地しています。

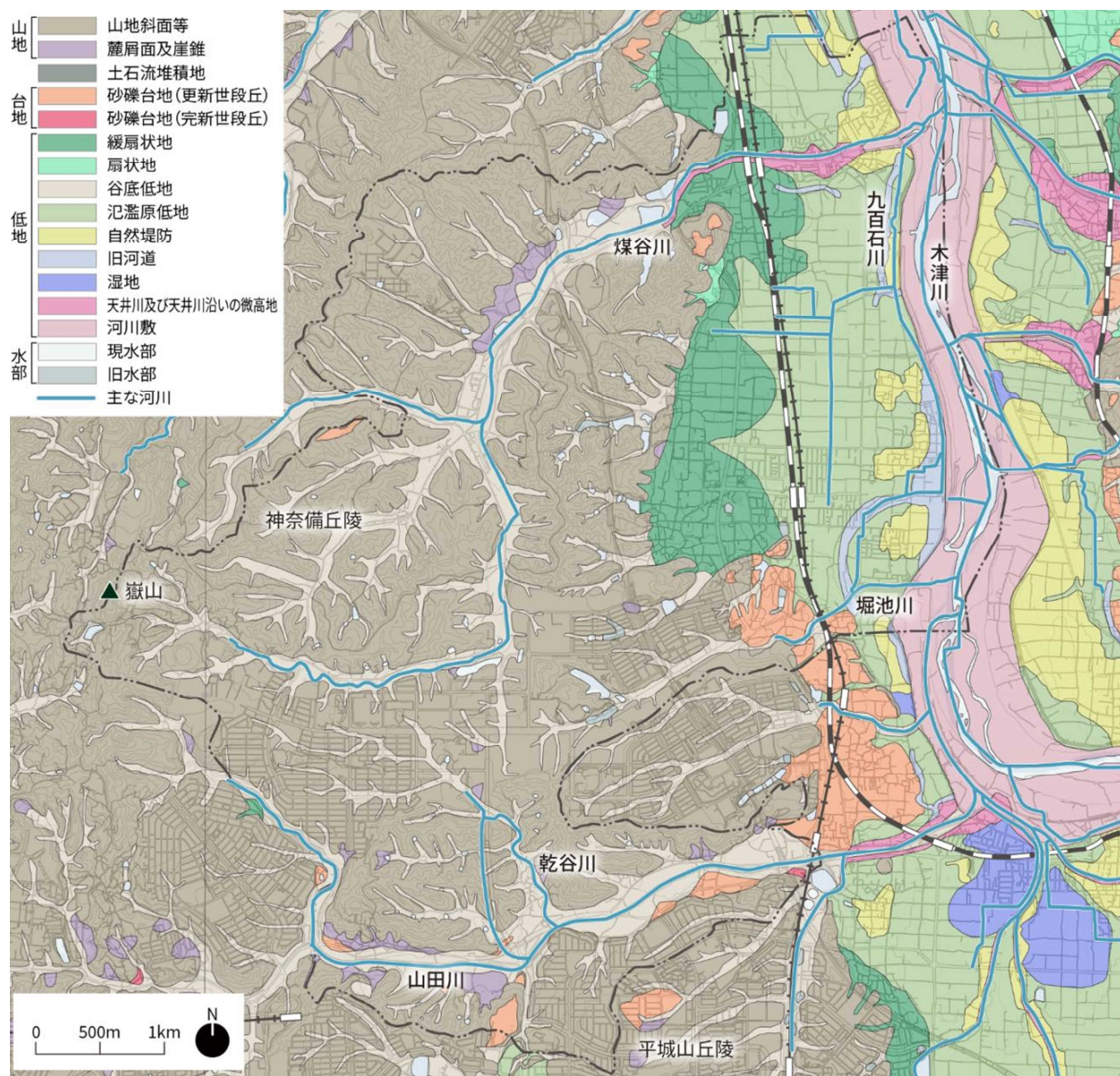


図 1-5 精華町の地形図

出典：土地履歴調査 GISデータ（国土地理院）をもとに編集・加筆

すすたに ほりいけ
 煤谷川・堀池川・山田川は、神奈備丘陵を水源とし、町域を西から東へと横断し、木津川に合流します。煤谷川や山田川の流域には、谷底平野が形成されています。

このほか、菅井・植田および山田川沿岸には河岸段丘がみられます。

5. 地質

東部の沖積平野は、木津川とその支流の堆積物から成る沖積層です。おおむね木津川沿いの氾濫平野と煤谷川沿いは砂がち堆積物であり、山田川沿いは礫^{れき}がち堆積物から成ります。

精華町に隣接する南部の丘陵地は大阪層群と呼ばれる洪積^{こうせき}層ですが、精華町側の丘陵地は礫^{れき}がち堆積物、砂泥互層、砂がち堆積物で構成されています。また、褶曲^{しゅうきよく}による隆起の軸線である背斜軸^{はいしゃじく}や、沈降の軸線である向斜軸^{こうしゃじく}が確認されます。

木津川の支川である煤谷川・堀池川は、花崗岩の風化による砂礫が河床に堆積した天井川です。

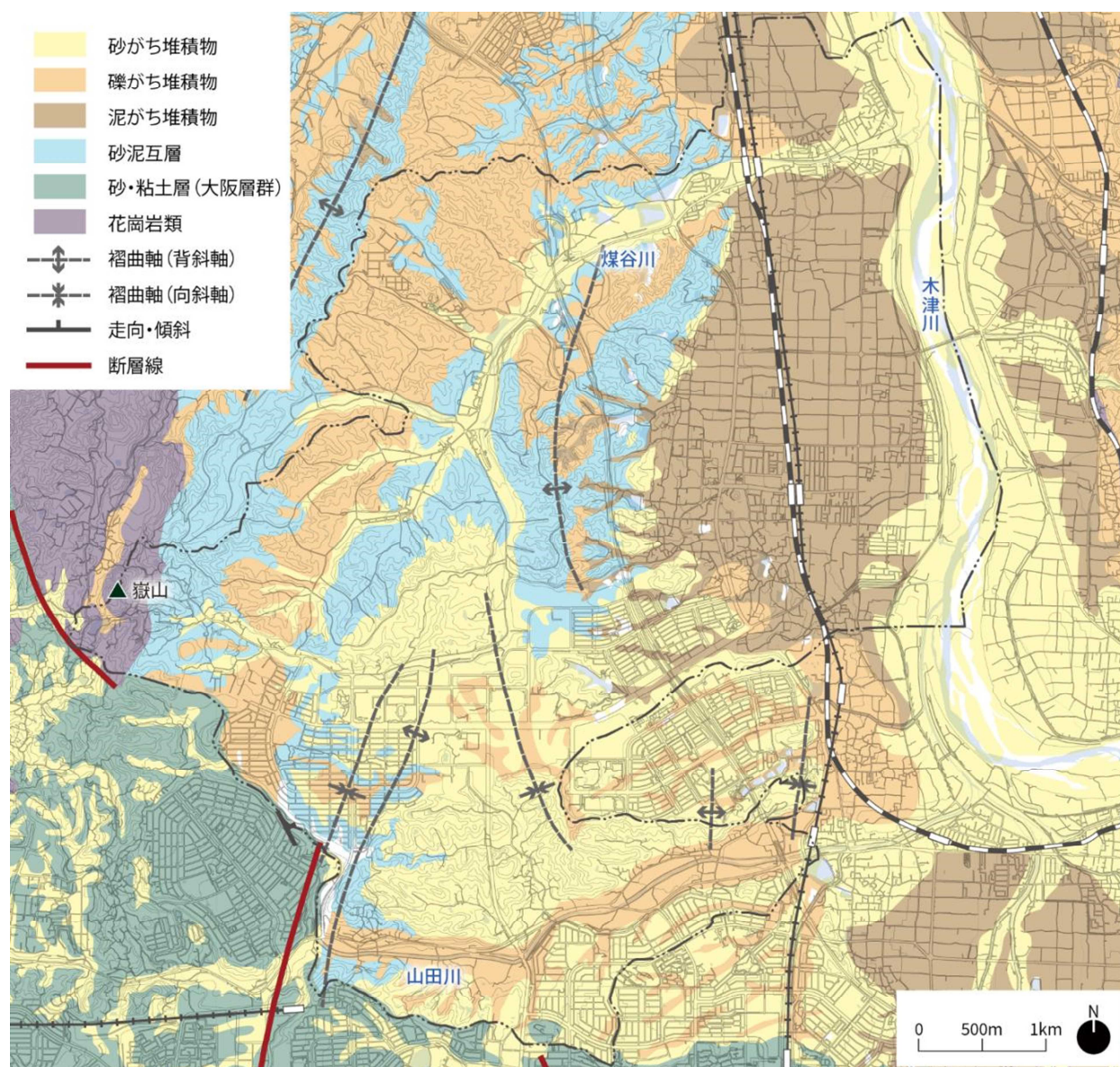


図 1-6 表層地質図

出典：5万分の1土地分類基本調査 GIS データ（国土地理院）をもとに編集・加筆

6. 気候

精華町域を含む山城地域は、瀬戸内気候区に属するとされ、併せて内陸的な気候の影響も強く受けています。年間の降水量は少なく、晴天の日数が多く、総じて温和な気候といえます。

図1-7は、精華町に隣接する京都地方気象台京田辺地域気象観測所における月別の平均気温と降水量を示したものです（過去30年間の平均）。

梅雨期や秋の台風シーズンに降水量が増えることがありますが、冬の積雪は稀です。夏期には、雷雨の発現回数が多く、時として集中豪雨を引き起こすことがあります。山城盆地の南端に位置することから、夏と冬の気温差は比較的大きいといえます。また、山田川沿いの地域では霧が多く発生します。

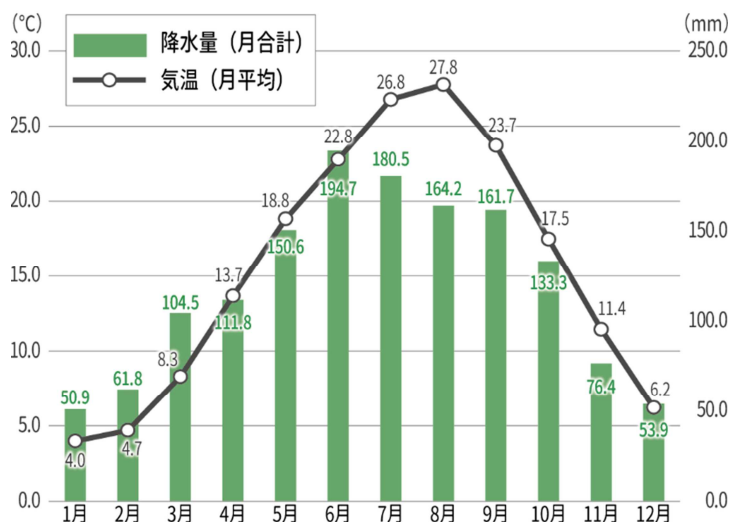


図1-7 月別の気温・降水量

出典：過去の気象データ（京田辺地域気象観測所平成6年（1994）～令和5年（2023））（気象庁）

7. 生態系

精華町域の山地・丘陵部の大部分は二次林で、集落の近くには竹林が多く、奥に入ると落葉広葉樹林のアベマキ・コナラ群集が展開しています（図1-8）。北西部の煤谷山周辺には、常緑針葉樹二次林のモチツツジ・アカマツ群集が分布します。神社の境内林のなかには常緑広葉樹を主とした極相に近い植生もみられます。

丘陵地の開発が進み、町域の山林面積は減少しましたが、残された里山や木津川とその支流周辺を中心に多様な動物や植物が生息・生育しています。

野生生物種の調査は、町全域では行われていませんが、住民の調査により光台や周辺の里山・公園等では、京都府レッドリスト（京都府内で絶滅のおそれのある野生生物種をとりまとめたリスト）で絶滅寸前種・絶滅危惧種・準絶滅危惧種・要注目種とされる野生生物種が確認されています（表1-2）。これらの野生生物種のうち一部は、町内の他地域でも見つかっています。



アカギツネ



トラツグミ



リンドウ

撮影：安長義高氏（3点とも）

表 1-2 光台と周辺の野生生物の一覧表

京都府レッドリスト カテゴリー	哺乳類	鳥類	は虫類 両生類	昆虫類	植物
絶滅寸前種 (京都府内において 絶滅の危機に瀕して いる種)		チュウヒ ミゾゴイ			キキョウ
絶滅危惧種 (京都府内において 絶滅の危機が増大し ている種)		オオタカ カッコウ クイナ サシバ チョウゲンボウ トラツグミ ハヤブサ ヒクイナ ミサゴ ヤマシギ			イヌセンブリ ウメバチソウ キンラン ギンラン クロヤツシロラン コハナヤスリ タヌキマメ フデリンドウ ミズオオバコ
準絶滅危惧種 (京都府内において 存続基盤が脆弱な 種)	カヤネズミ	アオバト アカゲラ アマサギ アリスイ イカルチドリ イソシギ オシドリ カイツブリ カワアイサ クサシギ サンコウチョウ タゲリ チュウサギ ノスリ ハイタカ フクロウ ミコアイサ ヤマドリ			オグルマ ヘラオモダカ
要注目種 (京都府内の生息・ 生育状況について、 今後の動向を注目す べき種および情報が 不足している種)	アカギツネ		(は虫類) シマヘビ ニホンマムシ (両生類) ニホンアカガエル	ギンツバメ ゲンジボタル トモンハナバチ ハイケボタル	イカリソウ キカラスウリ コクラン タシロラン ナンバンギセル リンドウ

※協力：安長義高氏

※京都府レッドリストの最新の改定年は、哺乳類・鳥類は令和3年（2021年）、植物（シダ・種子）は令和4年（2022年）、は虫類・両生類は令和5年（2023年）、昆虫類は令和6年（2024年）

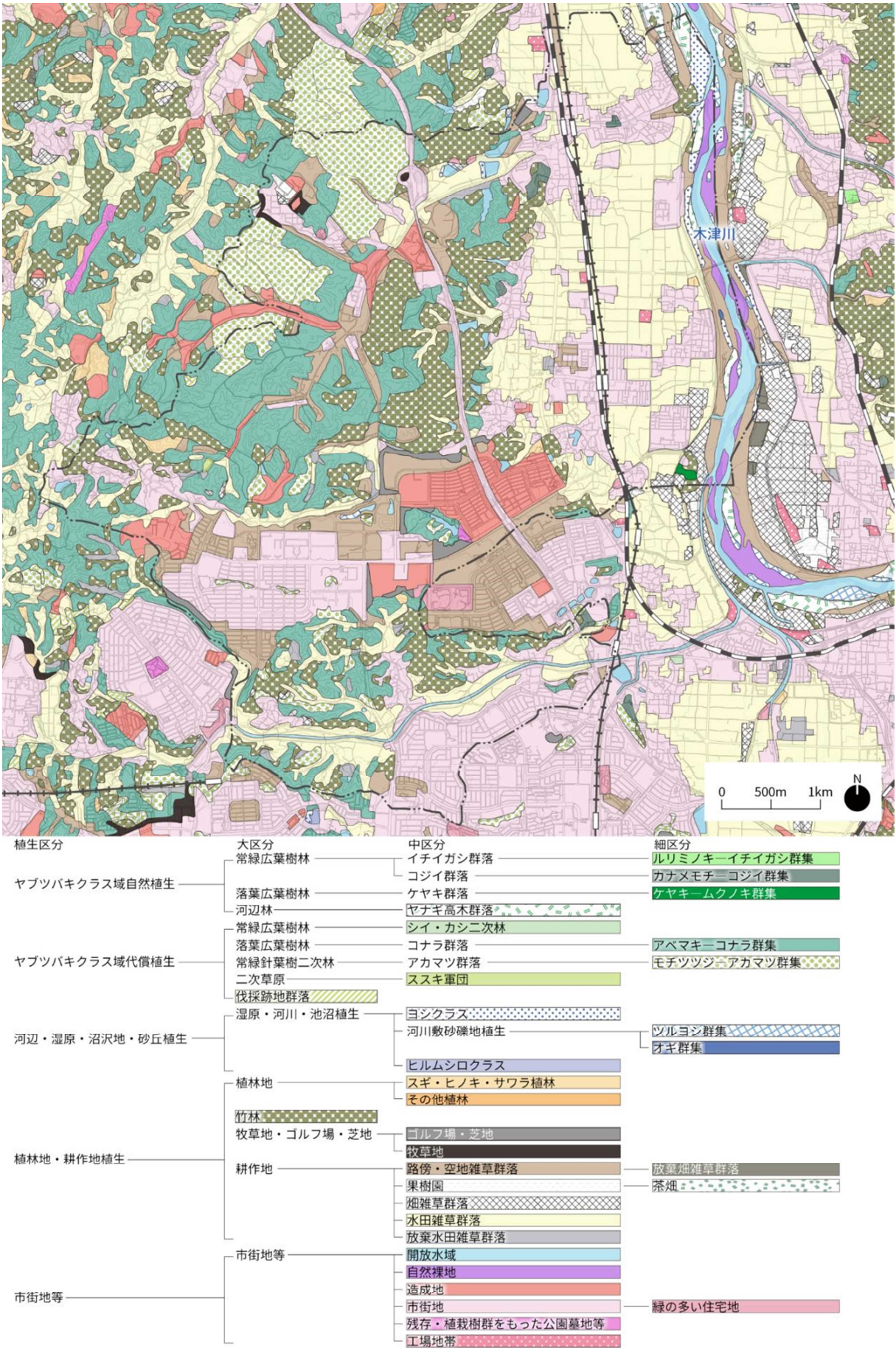


図 1-8 植生図 (第 6 回・第 7 回自然環境保全基礎調査結果)
出典：1/25,000 植生図 GIS データ (環境省生物多様性センター) をもとに編集・加筆

8. 本町を取り巻く災害の概要

(1) 過去の災害

■風水害

木津川左岸に位置する精華町では、古くから木津川の氾濫に悩まされてきました。江戸時代初期に木津川の堤防が築かれていましたが、たびたび決壊し、破堤した際の被害はかえって甚大なものとなりました。江戸時代中期、祝園村のうち南村は度重なる木津川の洪水被害を受けたため、享保13～14年（1728～29年）に低地（小字古屋敷）から微高地（小字榊ヶ坪）へ集落を移転させました。近代に堤防の整備が進むと、木津川の大規模な洪水の危険性は低くなりました。

第二次世界大戦後、南山城地域に大きな被害を与えた台風としては、昭和25年（1950年）9月3日のジェーン台風、昭和36年（1961年）9月15～16日の第二室戸台風が挙げられます。いずれも死者が生じ、多くの家屋が全半壊しました。

また、昭和28年（1953年）8月14～15日に発生した集中豪雨による南山城水害は、死者・行方不明者336人に及び、戦後の南山城地域における最大級の水害です。南山城水害では、とりわけ木津川右岸地域で甚大な被害が発生しました。左岸にあたる精華町域では、軽傷者1名に止まりましたが、流失埋没・冠水した田畑は567町に及びました。しかし、同年9月25日の台風13号による豪雨で再び浸水被害を受け、町域では死者1名が出ました。

近年では、短時間の集中豪雨や大型台風による被害が全国各地で頻発しています。精華町域においても、平成24年（2012年）8月13～14日に1時間雨量107mmを観測する豪雨が発生し、床上浸水16戸、床下浸水66戸の被害が出ました。

また、平成30年（2018年）9月4日には、非常に強い台風21号が近畿地方に上陸し、京田辺市では同地の観測史上1位となる最大風速19.2m/sを記録しました。この台風は京都府内の文化財建造物に大きな被害をもたらしました。町域でも神社の境内林で倒木が相次いだほか、古民家の損壊も確認されています。

■地震

幕末の嘉永7年（安政元年、1854年）6月15日に発生した安政伊賀地震は、木津川断層帯による内陸型地震で、現在の三重県伊賀市付近を震源とし、マグニチュード7.3と推定されています。伊賀上野（三重県）・四日市（同）・奈良では大きな被害に見舞われ、とりわけ伊賀上野では死者が約600人に及び、南山城地域でも建物の倒壊が多く見られました。なお、この年の11月4～5日には安政東海地震と安政南海地震（南海トラフ巨大地震）が連続して発生し、太平洋岸では大津波による甚大な被害がありました。

最近では、平成30年（2018年）6月18日に大阪府北部を震源とするマグニチュード6.1の地震（最大震度6弱）が発生し、町域では震度5弱を観測しています。

(2) 今後発生が予測される災害

■風水害

図 1-9 のとおり、木津川が氾濫した場合、JR 線以東が広く浸水することが想定されています。また、煤谷川が氾濫した場合には、町北東部で、2.0m未滿の浸水が発生する可能性があります。

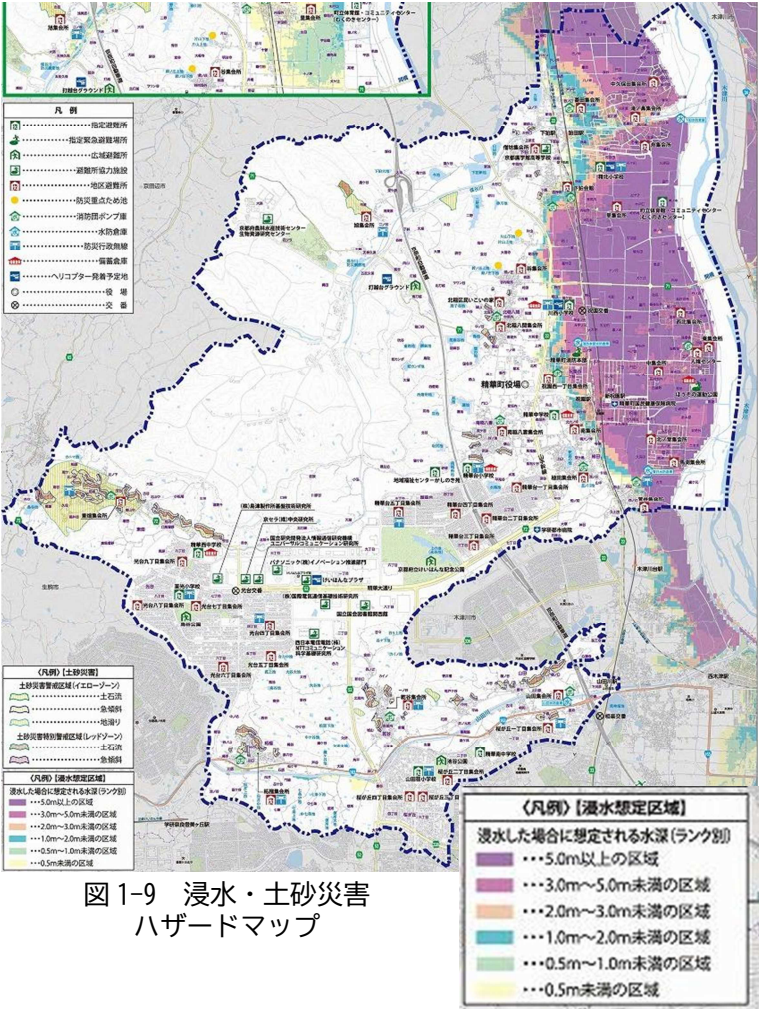


図 1-9 浸水・土砂災害
ハザードマップ

■地震

京都府の調査によると、町に大きな被害を及ぼすと考えられる断層による地震の震度想定は表 1-3 のとおりです。特に、「生駒断層帯」、「奈良盆地東縁断層帯」を震源とする地震が発生した場合、最大震度 7 の地震動が発生すると想定されています。また、京都府による被害想定では、南海トラフ地震が発生した際の被害として、町域では最大震度 6 強、死者数 10 名が想定されています。

表 1-3 本町での震度想定

断層名	最大 予測震度	建物被害		人的被害		
		全壊	半壊・一部半壊	死者数	負傷者数	避難者数
生駒	7	2,680	3,620	150	1,200	11,400
木津川	6 強	1,860	3,120	80	870	8,820
奈良盆地東縁	7	1,540	3,400	110	1,030	10,420
有馬高槻	6 弱	460	1,460	10	250	3,220
和束谷	6 強	450	1,450	10	270	3,470

出典：京都府における地震・津波による被害想定

第2節 社会的状況

1. 人口動態

町制を施行した昭和30年（1955年）には、精華町の人口は9,452人でした。その後、ゆるやかに増加を続けていましたが、昭和60年代以降、学研都市の建設と大規模な宅地開発が開始されると急増しました。平成2年（1990年）から平成17年（2005年）までの人口増加は著しく、この15年間で17,519人から34,236人へと倍増しています。特に、平成12年（2000年）から5年間の人口増加率は29.9%と全国1位でした。しかし、その後、人口の増加は鈍化し、平成27年（2015年）の36,376人をピークに、令和2年（2020年）には36,198人と初めて減少に転じました。

一方で、世帯数は増加を続けています。一世帯当たりの人口が平成2年（1990年）は3.63人であったものが、令和2年（2020年）は2.68人と減少しており、核家族や単身世帯が増加しています。

なお、令和7年（2025年）8月1日現在の人口は●●人、世帯数は●●世帯です（住民基本台帳による）。

精華町第6次総合計画では、今後、鉄道駅周辺において人口定着を誘導することにより、精華町の令和14年度（2032年度）末の人口を39,000人に設定しています。

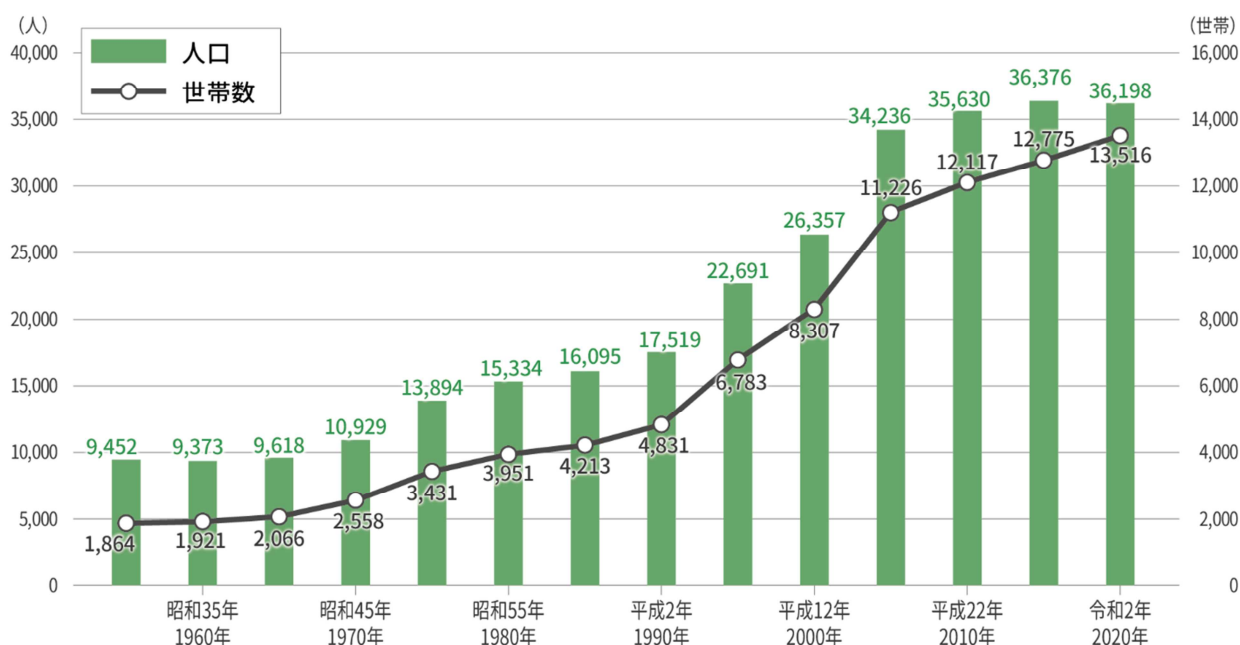


図1-10 人口と世帯数の推移

出典：実績値は国勢調査（総務省、各年10月1日現在）

平成12年（2000年）と令和2年（2020年）年の年齢（3区分）別人口の構成についてみると、年少人口（14歳以下）は4,389人（全年齢に占める構成比16.7%）から5,089人（14.1%）となり、生産年齢人口（15～64歳）は18,462人（70.1%）から21,907人（60.8%）と推移しています。年少人口・生産年齢人口とも増加していますが、全年齢に占める割合は減少しています。これに対し、老

年人口（65歳以上）は、3,493人（13.3%）から9,035人（25.1%）へと人数・割合とも増加しており、高齢化が進んでいることが分かります。

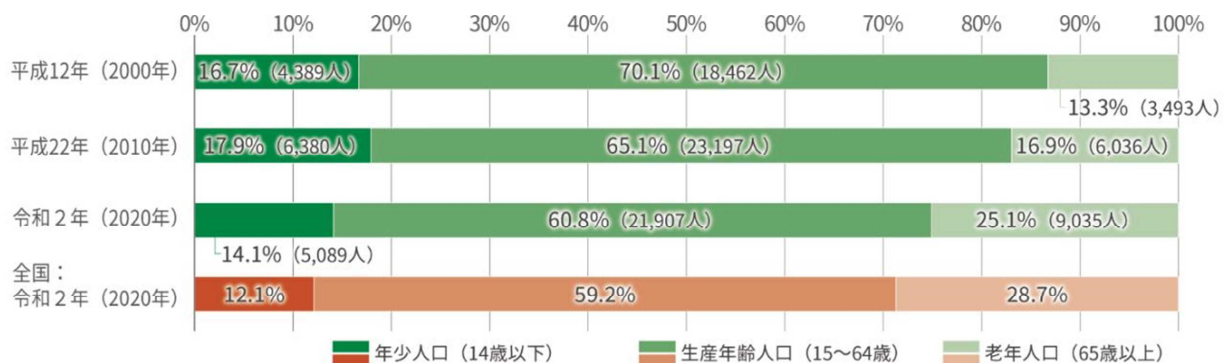


図1-11 年齢区分別人口の推移（年齢不詳を除く）

出典：国勢調査（総務省、各年10月1日現在）

2. 産業

（1）産業大分類別の就業者数

国勢調査によると、令和2年（2020年）の産業大分類別の就業者数は、第3次産業の割合が75.9%と最も高く、次いで第2次産業が19.8%を占め、第1次産業は2.1%です（図1-12）。平成12年（2000年）と比べると、第3次産業の割合が増加しています。また、全国平均と比べても第3次産業の割合が高くなっています。

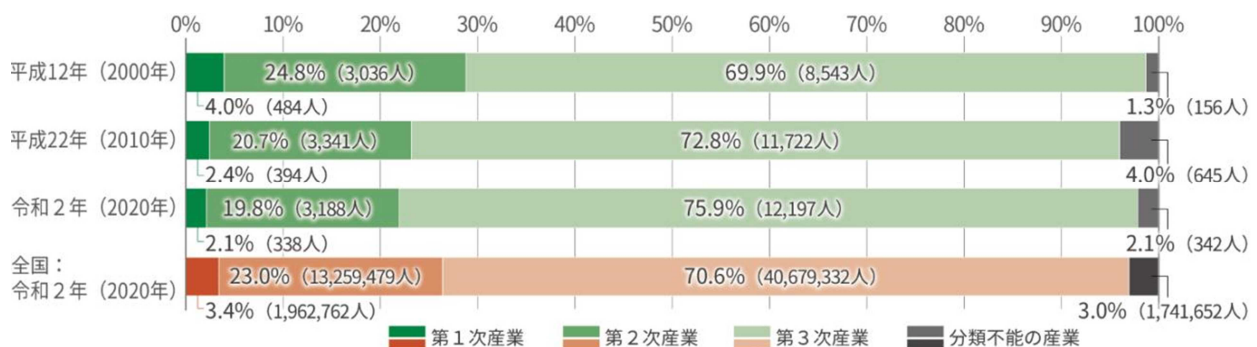


図1-12 産業大分類別の就業者数

出典：国勢調査（総務省、各年10月1日現在）

（2）農業

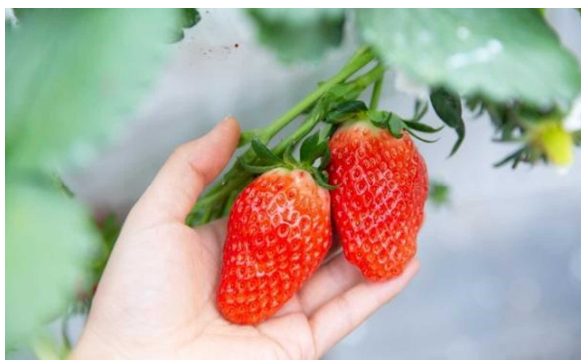
町域の平野部には水田が広がり、相楽郡の「穀倉地帯」と呼ばれたように、古くから稲作が盛んに行われてきました。また、京都・大阪・奈良に近い立地を活かした都市近郊農業が行われ、トウガラシ（伏見甘長トウガラシ・万願寺トウガラシ）やイチゴ等を栽培しています。特にイチゴは精華町の代表的な特産物であり、イチゴ狩りの観光農園も営まれています。近年では、



洛いも

京都府立大学等と連携してヤマノイモの一種である「^{らく}落いも」の特産化を進めています。こうした農作物の特産化により、図 1-13 に示すように、近年の農業生産額は増加傾向にあります。

一方で、町域の耕地面積は、平成 17 年(2005 年)には 252 ha ありましたが、令和 2 年(2020 年)には 183 ha となり 15 年間で 3 割程度減少しています(図 1-14)。同じ期間に農業経営体数は 409 戸から 249 戸に、農業就業人口は 733 人から 352 人と大きく減少し、農業就業人口のうち 65 歳以上の占める割合は、60.0%から 67.0%まで上昇しており、農業従事者の減少と高齢化が進んでいます(図 1-14、図 1-15)。



特産品であるいちご

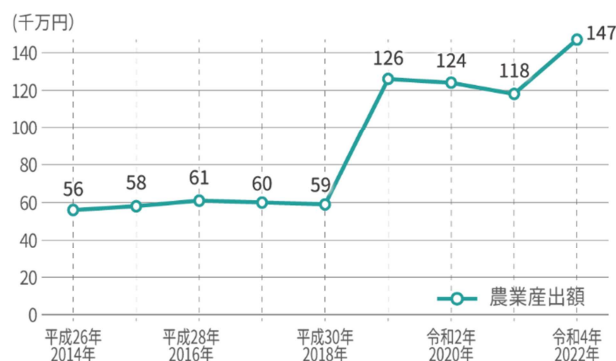


図 1-13 農業産出額の推移

出典：市町村別農業産出額(推計)(農林水産省)

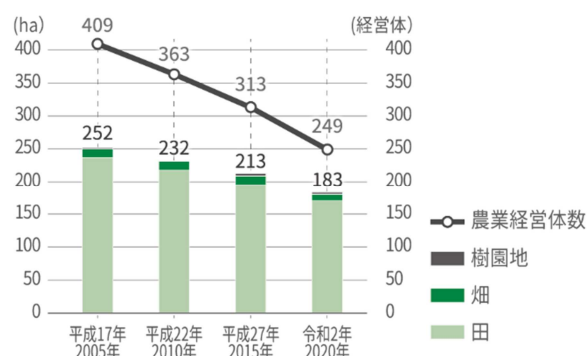


図 1-14 地目別経営耕地面積・農業経営体数の推移

出典：農林業センサス(農林水産省、各年2月1日現在)

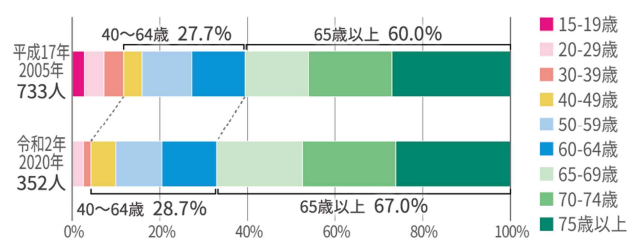


図 1-15 年齢別農業就業人口

注：農業経営体のうち販売農家のデータ

出典：農林業センサス(農林水産省、各年2月1日現在)

(3) 商工業

「令和 3 年経済センサスー活動調査」によれば、精華町内における卸売業の事業所数は 20、小売業は 108 あり、就業者数は卸売業が 82 人、小売業が 1,478 人でした。年間販売額をみると、卸売業が 86 億 1,200 万円、小売業が 278 億 2,200 万円ありました(表 1-4)。

表 1-4 商業事業所数・従業者数、年間商品販売額

調査年	事業所数			従業者数(人)			年間商品販売額(万円)		
	合計	卸売業	小売業	合計	卸売業	小売業	合計	卸売業	小売業
平成 24 年 (2012 年)	138	21	117	1,316	87	1,229	2,864,200	885,300	1,978,900
平成 28 年 (2016 年)	153	27	126	1,405	117	1,288	2,646,800	311,100	2,335,800
令和 3 年 (2021 年)	128	20	108	1,560	82	1,478	3,643,400	861,200	2,782,200

出典：経済センサス(経済産業省、平成 24 年は 2 月 1 日現在、それ以外は 6 月 1 日現在)

また、同調査によると、精華町内における製造業（従業員4人以上）の事業所数は27事業所あり、従業員数は1,337人、製造品出荷額等は448億3,190万円に及んでいます。製造業の事業所の4割が従業員数20人以下の小規模な事業所です（図1-16）。産業中分類別の内訳は、表1-5のとおりです。

なお、令和6年（2024年）年6月1日現在の精華町商工会の会員数は378人で、建設・小売・飲食・サービス・製造等各業種の商工業者が加入しています。

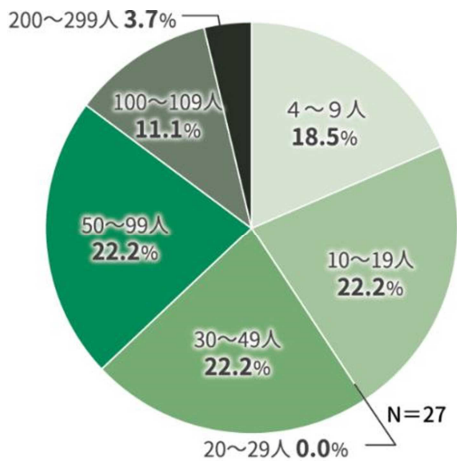


図1-16 従業員数別事業所数（製造業）
出典：令和3年経済センサス（経済産業省）

表1-5 産業中分類別製造品出荷額等・事業所数・従業者数

	製造品出荷額等 （万円）	事業所数 （事業所）	従業者数 （人）
食料品	X	1	4
飲料・たばこ・飼料	X	0	0
繊維	X	1	6
木材・木製品	0	0	0
家具・装備品	0	0	0
パルプ・紙	X	1	19
印刷	X	1	10
化学	X	2	166
石油・石炭	0	0	0
プラスチック製品	859,937	5	396
ゴム製品	X	1	46
皮革	0	0	0
窯業・土石	X	2	78
鉄鋼	0	0	0
非鉄金属	0	0	0
金属製品	460,931	3	146
はん用機械	X	1	62
生産用機械	X	2	40
業務用機械	X	1	56
電子部品	0	0	0
電気機械	X	4	252
情報通信	0	0	0
輸送用機械	X	1	7
その他	X	1	49
合計	4,483,190	27	1,337

出典：令和3年経済センサス-活動調査（経済産業省）
備考：Xは秘匿値

（4）学研都市と研究開発

学研都市には、国公立の研究機関・大学のほか、大企業から中小のベンチャー企業までさまざまな規模の民間企業が拠点を置き、相互の人的・技術的交流を図りながら活動をしています。

学研都市全域（8市町）における立地施設数は、令和5年度（2024年度）末で157施設あり、その内訳は、研究施設が36施設、研究開発型産業施設が86施設、大学・その他が35施設です。研究開発型産業施設とは、国の「関西文化学術研究都市の建設に関する基本方針」に規定された、研究開発と生産を一体的に行う企業の事務所を指します。平成19年（2007年）に学研都市建設に関する国の基本方針が変更されたことを契機に、研究開発型産業施設の立地が進み、学研精華・西木津地区への産業集積が形成されました。

学研都市は、「世界トップレベルの研究開発型オープンイノベーション拠点」を目指し、グロー

バルな視点と産学官住の連携による研究開発の事業化促進に取り組んでいます。環境・エネルギー、情報通信技術（ICT）、バイオサイエンス、光科学、ロボティックス等、次世代スマートシティの実現に寄与する様々な分野で先端的な研究開発が行われています。また、新規企業の起業や成長を支援する施設も設けられています。



精華大通り

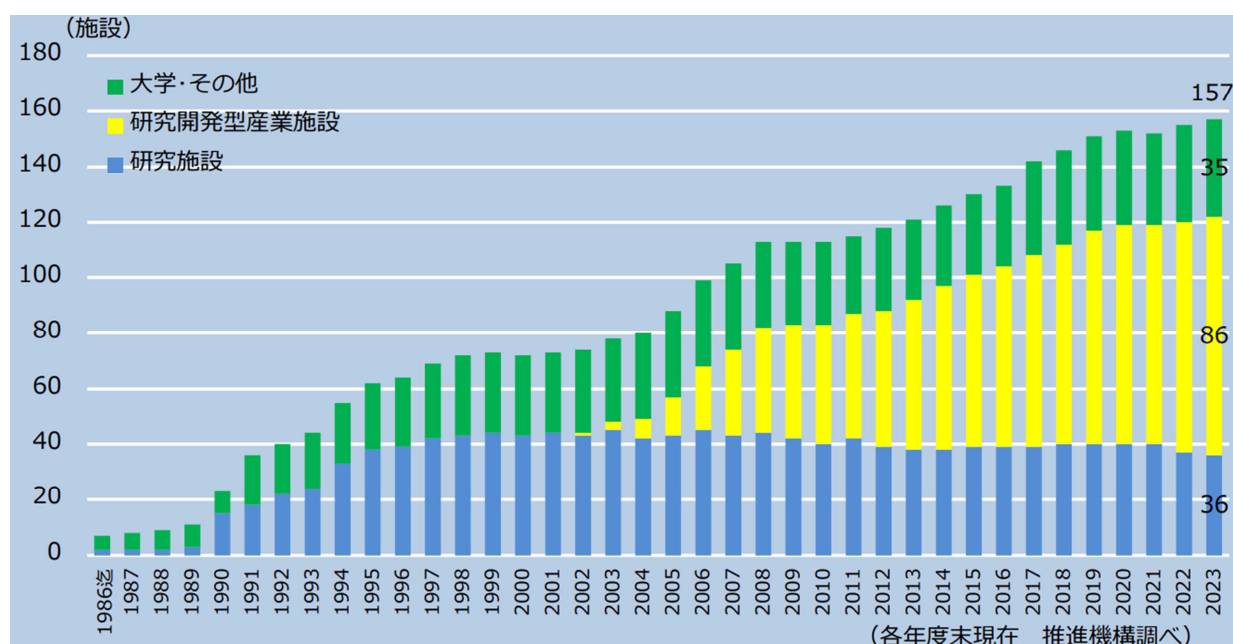


図1-17 学研都市全域（8市村）の立地施設数の推移

出典：けいはんなインジケータマップ 2024（公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構）

（5）観光

平成22年（2010年）から令和4年（2022年）までの精華町の観光の状況について、「京都府観光入込客調査」をみると、精華町を訪れる観光入込客数はおおむね毎年60万人代で推移していましたが、令和2年（2020年）以降は新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う影響で落ち込んでいます（図1-18）。

町を訪れた観光客の9割以上は日帰りです。令和元年（2019年）の場合、町を訪れた観光入込客71.8万人の町内観光消費額は2億3,460万円ですが、このうち日帰り客69.6万人の消費額は6,249万円、宿泊客2.2万人の消費額は1億7,211万円です。このことから、町内における観光消費額の大半はホテルの宿泊費で占められていることが分かります。

精華町での観光の目的は「スポーツ・レクリエーション」が圧倒的に多く、そのほか「産業観光」や「行祭事・イベント」もみられます（図1-19）。また、3～5月と11月に比較的観光客数が多く、その他の時期は少なくなっています（図1-20）。

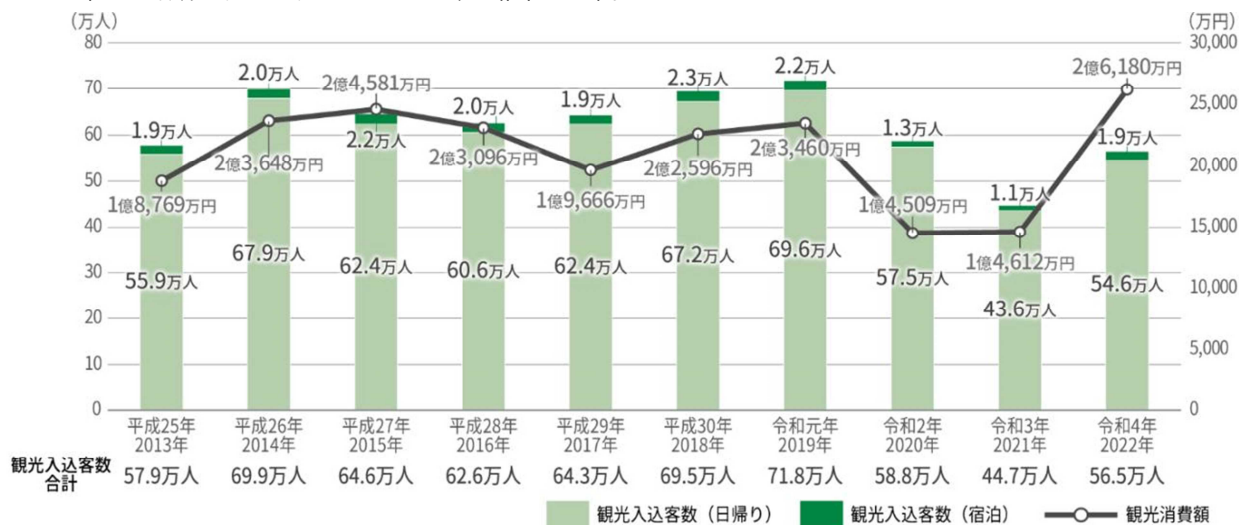


図1-18 観光入込客数と観光消費額の推移

出典：京都府観光入込客数等調査報告書（京都府商工労働観光部）

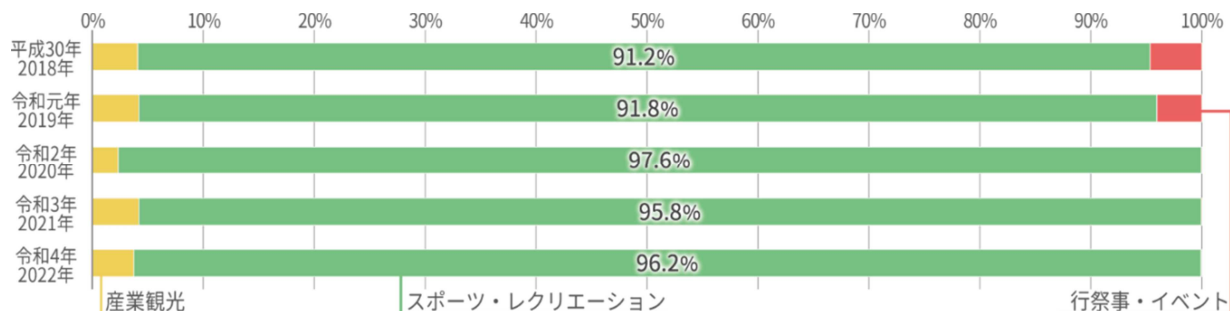


図1-19 目的別観光入込客数の推移

出典：京都府観光入込客数等調査報告書（京都府商工労働観光部）

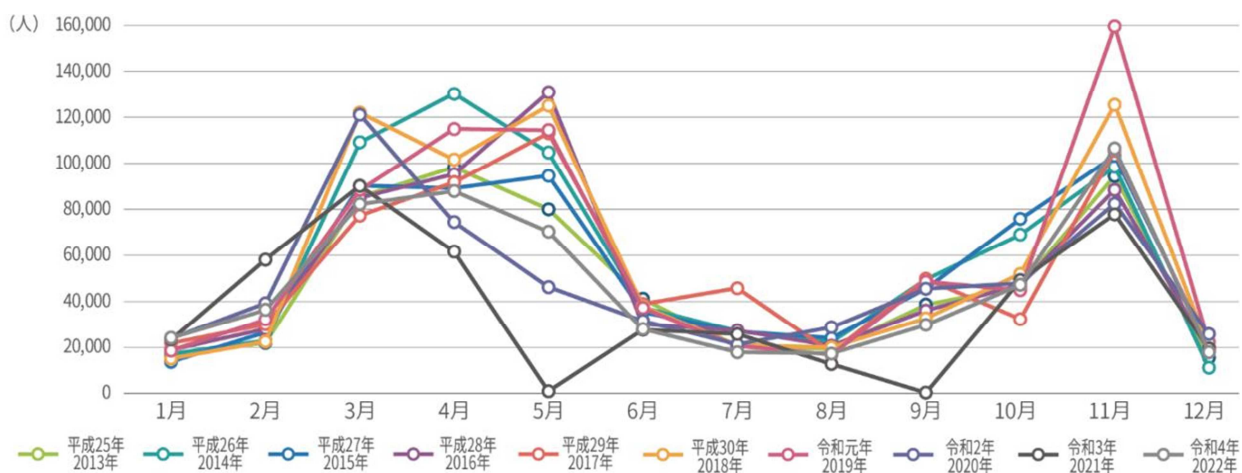


図1-20 月別の観光入込客数

出典：京都府観光入込客数等調査報告書（京都府商工労働観光部）

3. 交通

精華町は、京都や奈良、大阪という大都市にも近く、便利な立地といえます（図 1-21）。

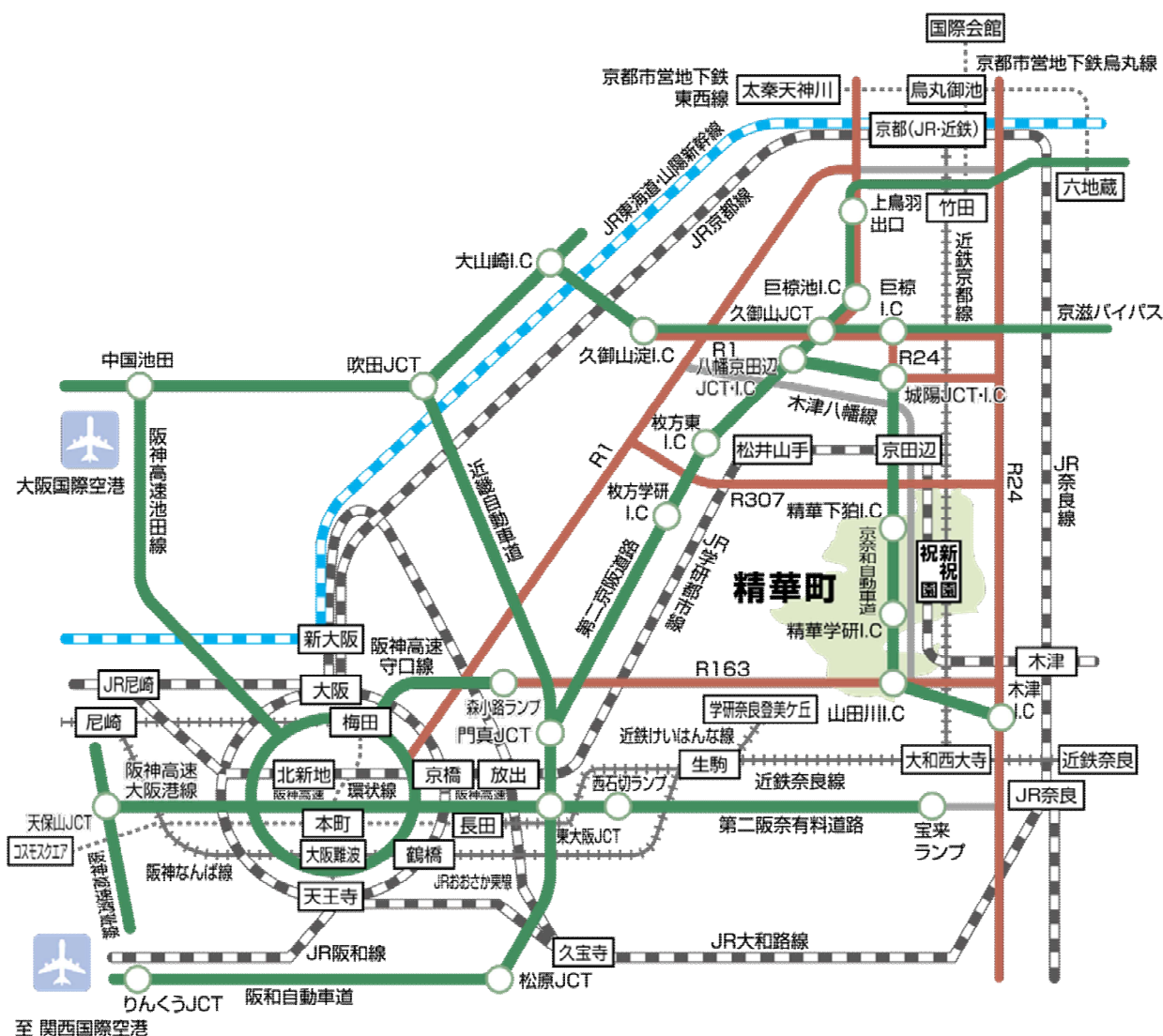


図 1-21 精華町へのアクセス（広域）

(1) 道路

広域的な都市連絡のための広域幹線道路としては、町域と南北方向（奈良市と京都市方面）を結ぶ京奈和自動車道と、東西方向（三重県と大阪市方面）を結ぶ国道 163 号があります（図 1-22）。近年、第二京阪道路の開通や、新名神高速道路の一部区間（城陽 JCT・IC～八幡京田辺 JCT・IC）の開通に伴って、京都市方面とのアクセスが向上しました。今後、新名神高速道路の全線開通が実現すれば、全国とのネットワークも広まることが期待されています。

隣接都市との連携や地域間の交通を円滑に処理する幹線道路としては、南北方向では八幡木津線（山手幹線）・奈良精華線、東西方向では枚方山城線・生駒精華線（精華大通り線）等があります。

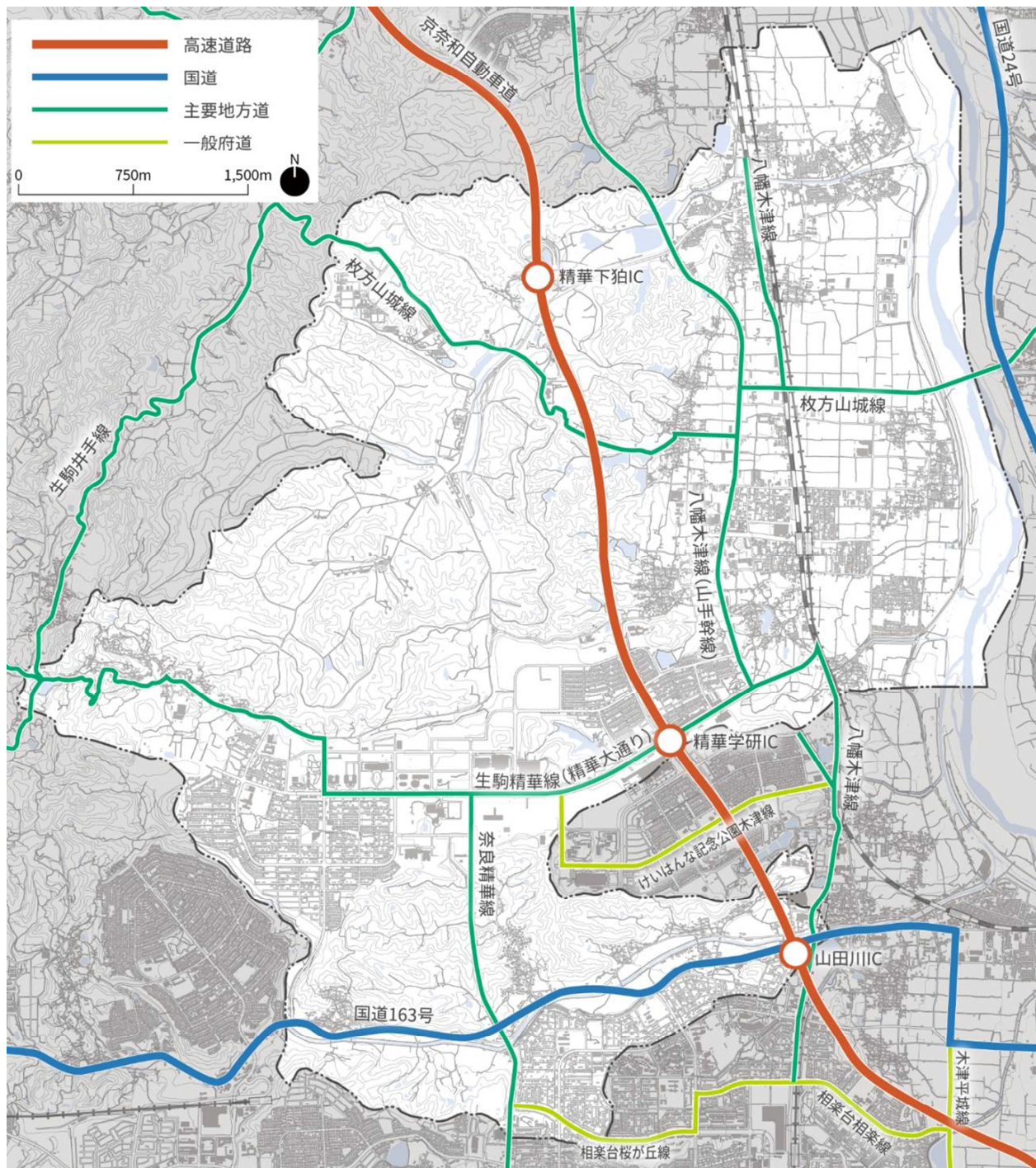


図 1-22 町内の主な道路

(2) 鉄道

鉄道は、京都市と奈良市方面（京都駅～大和西大寺駅）を結ぶ近鉄京都線と、大阪市と木津川市方面（京橋駅～木津駅）を結ぶ JR 学研都市線（片町線）が走っています（図 1-23）。

町内に設置された駅は、近鉄が粕田・新祝園・山田川の 3 駅、JR が下粕・祝園の 2 駅です。このうち近鉄新祝園駅は急行が停車し、町内では最も乗降客数が多い駅です。近鉄新祝園駅と JR 祝園駅は隣接し、高架の連絡通路で結ばれており、西口の駅前広場は学研都市精華・西木津地区方面へ向かう路線バスのターミナルとなっています。

(3) 路線バス

奈良交通の路線バスが学研都市精華・西木津地区を中心に運行されており、近鉄新祝園駅・JR 祝園駅と連絡するほか、奈良市の近鉄けいはんな線学研奈良登美ヶ丘駅を結んでいます。平日の朝夕には連節バスも走行しています。

また、町域の南部地域には、コミュニティーバスとして「精華くるりんバス」が運行されています（図1-23）。一方、町域北部地域及び東畑地域等では、予約型の乗合バス（デマンド交通）が導入されています。

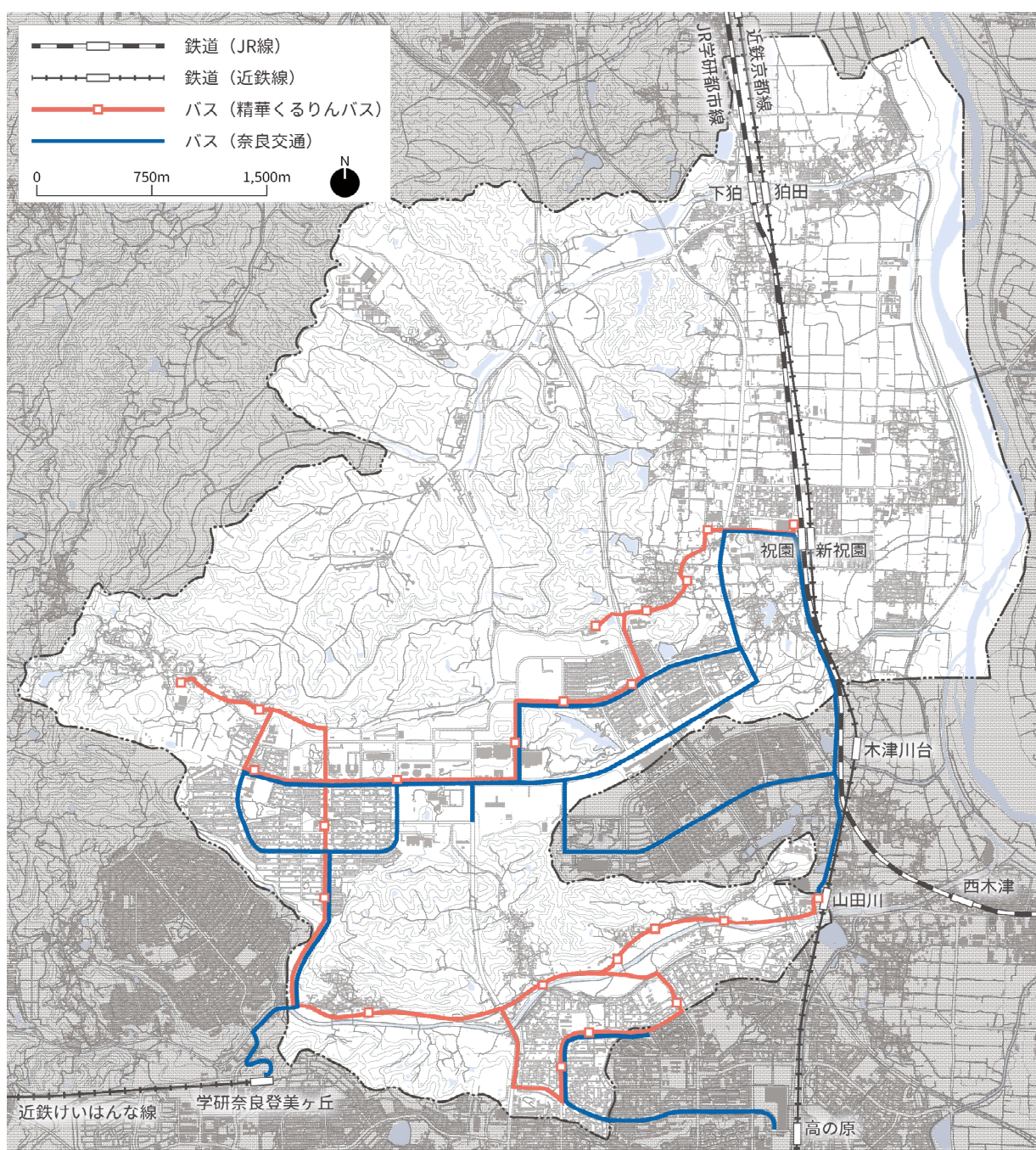


図1-23 町内の公共交通

4. 土地利用

町域東部の木津川沿いの平野部や南部の山田川沿いには水田が広がり、稲作を中心とした農業が行われています。

町域の西部から南部にかけては丘陵地が広がります。このうち、町域中西部および南部の丘陵地は学研都市として開発が進められ、現在は研究施設や住宅が立ち並んでいます。住宅地は平野部の鉄道駅周辺にも広がっています。

一方で、町域北西部や南部の丘陵地には、開発が及ばず山林が維持されている地域もあります。また、町域西部には自衛隊の弾薬庫が立地しています。

精華町では、「精華町第6次総合計画」において、町内に「農のゾーン」・「まちのゾーン」・「山のゾーン」・「未来のゾーン」・「ふれあいゾーン」という5つのゾーンを設定し、土地利用の基本的な方向性を示しています（図1-24）。

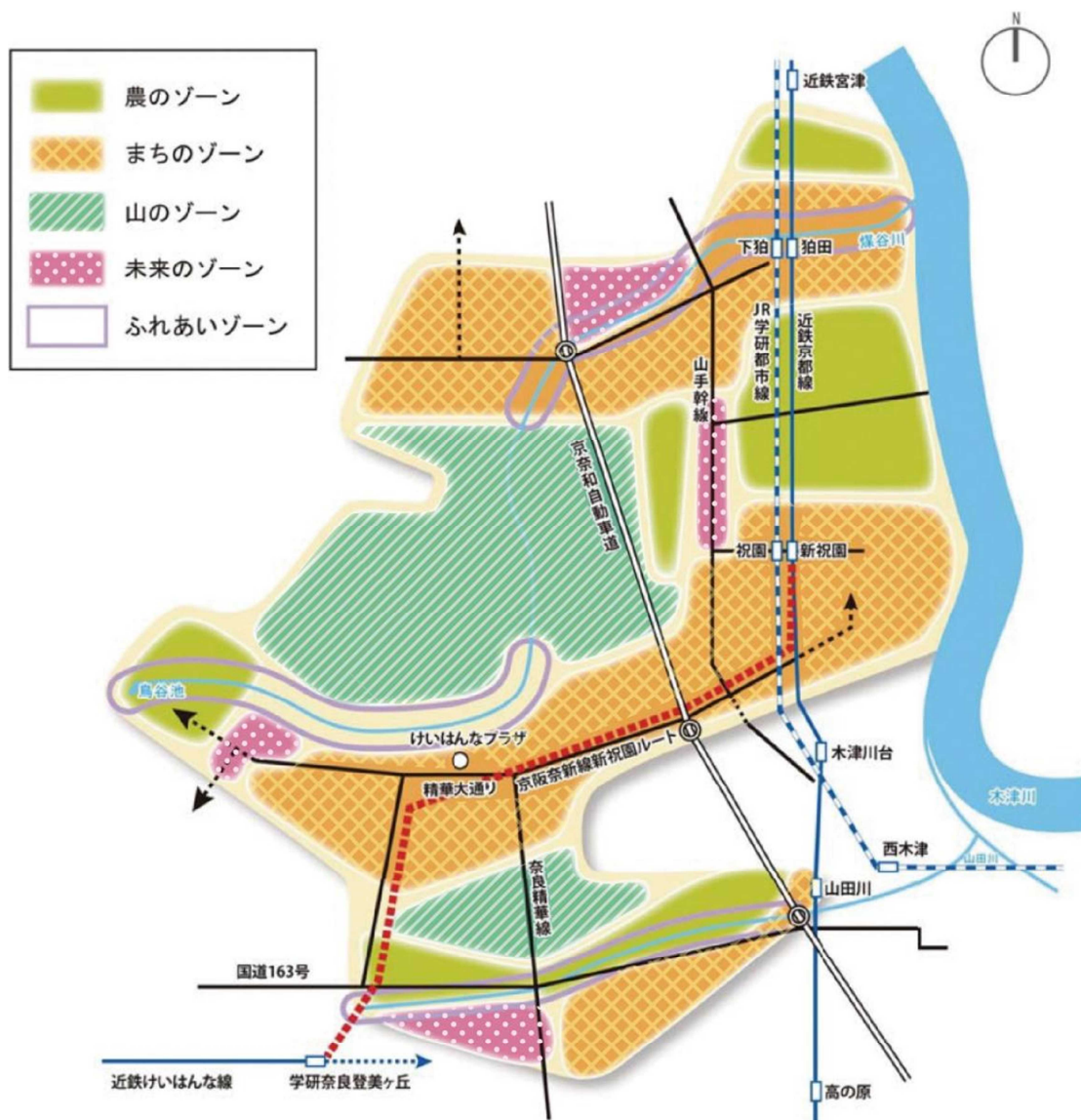


図1-24 総合計画で示された土地利用の方向性

5. 景観

平成20年（2008年）9月に策定された「関西文化学術研究都市（京都府域）における景観の形成に関する計画」に基づき、精華・西木津地区（光台、精華台）並びに南田辺・狛田地区（精華町域内）における対象区域については、良好な都市景観を形成するため、緑化やセットバック（道路からの壁面後退距離）等の景観に配慮した規制誘導を図っています。

6. 公共施設

町内には、小学校5校、中学校3校、高等学校1校（私立）、特別支援学校1校、大学1校が立地しています。その他の主な公共施設として、町立の図書館やコミュニティーホールのほか、国立国会図書館、けいはんな記念公園やけいはんなプラザ等、学研都市関連の施設があります（図1-25）。

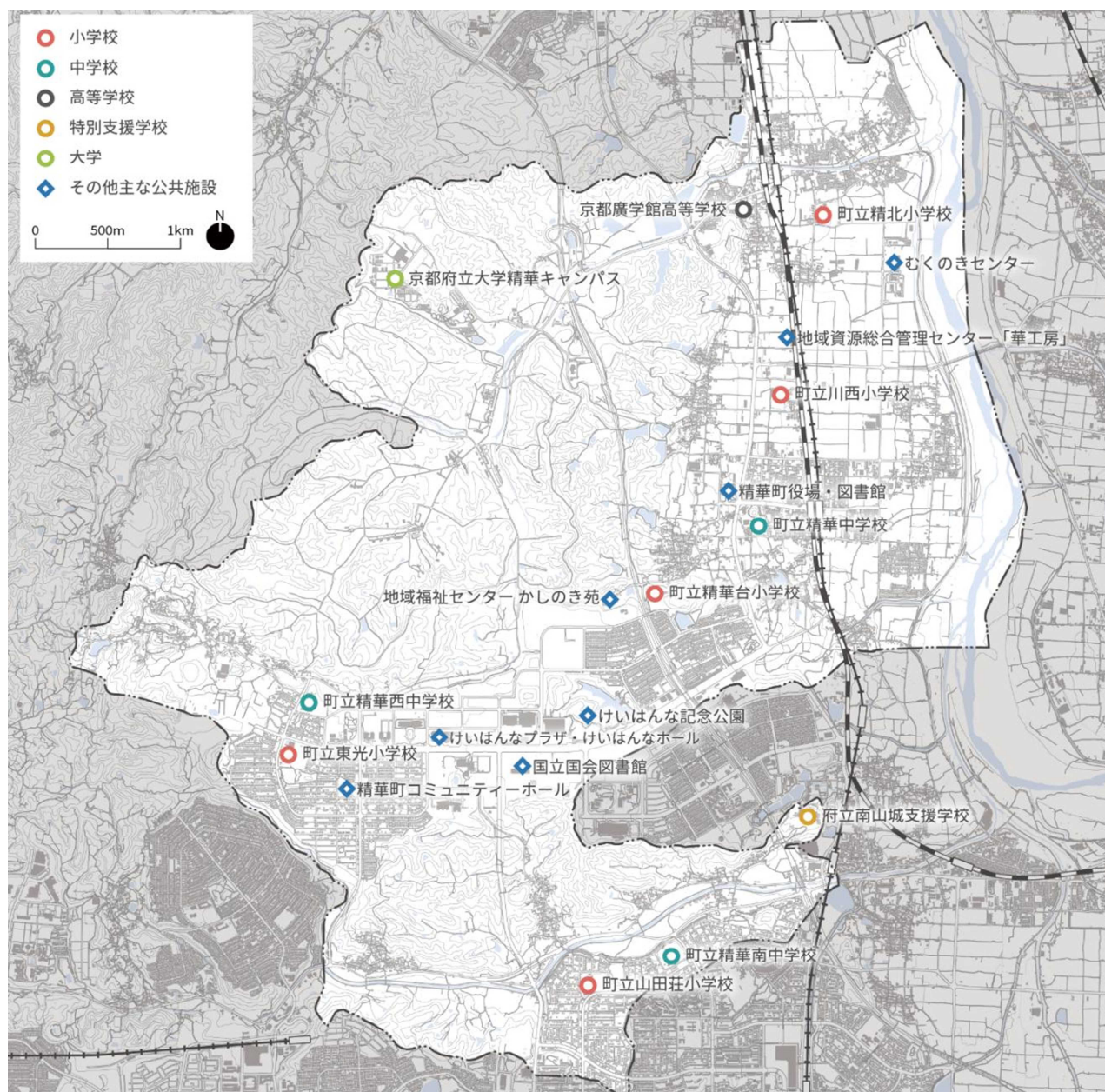


図1-25 町内の主な公共施設の位置